国語　文学部、教育学部、経済学部

一　現代文

問一　a　懐　b　ヒカ　c　アイガン　d　コウズカ　e　ゼイタクヒン　f　危惧　g　高騰（昂騰）
h　甲殻　i　ショウジン　j　装置

問二　環境負荷が大きいという問題と、同じほ乳類を殺して食べていいのかという倫理的問題。（四〇字）

問三　他人と協力し人間の生存に貢献するはずのやさしさを他の生物に拡張しても、人間の生存に貢献しないから。（四九字）

問四　かつては栄養が得られれば人口が増加し常に栄養が不足していたが、現代の先進国では食糧生産と分配を効率化する協力体制が共感能力によって可能となり、出生率が下がる中で栄養が余っている点。（九〇字）

問五　人間が自らに類似した他の生物にまで共感を拡張していく傾向は、科学技術の進歩によって人間の生存に必要な栄養を動物ばかりか植物の命さえも奪わずに摂取できるようになるにつれて、動物だけでなく植物を含むすべての生物に及ぶようになると考えている。（一一八字）

問六　ア・オ

© 河合塾 2024 年

二　古文

問一　（ア）　下男は、主人光宗のもとに旧友が訪ねて来ているとは思いも寄らない様子であるが、

（イ）　わが身に寄り添って離れないものとしては、昔の親しかった人々の面影ばかりであるがその人々とも、配流の身の今はましてどうして会えようか、いや会えまいと思っていたのに、つらい日々に耐えている私の寿命の長さに対する恨めしさも忘れて、あなたと再会できた今は嬉しいことだ。

（ウ）　あなたと同じ出家姿で、修行に出てしまいたい気持ちがして、出家して旅をするあなたのことが羨ましいけれど、配流の身では、世間に対するはばかりも多く、また、出家の妨げとなる幼いわが子までも見捨てることができなくてここを離れられない。

問二　（A）　あなたは世間一般の人も心を慰めることができないと言うが、幼いわが子のことなどあれこれ物思いをする心の闇が晴れない私にとっては見る甲斐もないことだ。月の名所と言われる姨捨山の月であっても。

（B）　もしあなたが私のことを忘れないのならば、再び麻績の地にある粗末な私の家へ訪ねて来てくれ。かつてあなたが見た姿でもない小忌衣姿の私の袂であったとしても。

問三　①　十六夜日記

②　とはずがたり

© 河合塾 2024 年

三　漢文

問一　a　あるいは　　b　いやしくも　　c　や

問二　蟹の大群が湿地から長江へと向かう際、漁師たちがざるを仕掛けて蟹の進む道を断ち切り、捕獲すること。

問三　その後で漁師の仕掛けたざるをよじのぼってのり越え、逃げていく蟹は六割から七割いる。

問四　形質浸く旧より（も）大なり。

問五　長江から海へと向かう多くの蟹が、湿地から長江へと向かう時と同じように、漁師の仕掛けたざるを乗り越えて進んでいくということ。

問六　小さな蟹が、生まれた湿地から長江へ移って成長し、さらに広い海へ移ってより成長するように、段階を経て大きくなるさまは知恵の現れである。これに対して今の学者は、諸子の取るに足りない論から孟子・荀子・揚雄へ進み、さらに六経の聖典へと進んで学ぶべきなのに、段階を経ることなく中正の道の神髄を求めてしまうから。（一五〇字）

© 河合塾 2024 年